No.

Date 26/11/5

リズム pp.79~117

○リズムを書く

└ようするにここは音符/休符の話 (もんだん五線譜見てた今この話???)
以下の話のでpp.87までスキップ.

・符尾の向きや休符の位置の例外
{ 声部の上パート→尾は上向き
{ 〃 下パート→尾は下向き
五線譜1つに2パート以上入るときは休符の位置も適宜ずらす.

・拍子と小節
リズム
┣拍 ; 音楽的に自然に刻める最小単位
┗拍子 ; 拍をまとめて規則的な強弱をつけて繰り返すパターン

・拍子記号

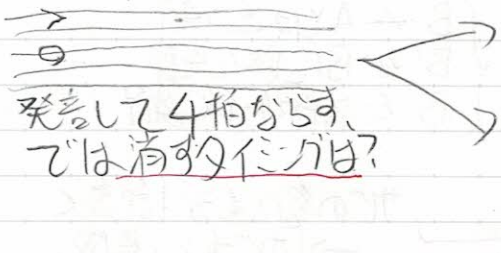


分子→何拍子か? (拍子の数はいくつ?)
分母→一拍の長さは? (拍をカウントする単位の音符は?)

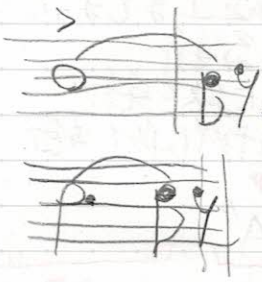
本来は五線譜の各段に1個ずつ書くが、
パート数が大な楽面ではまとめて大書することもある.

②しばらく楽典の話が続く.
気になるなら音楽用語辞典とか読むとして、いったんpp.107まで
省略.

○正しいリズムの書き方
たとえば、全音符があるとする。



発音して4拍ならす、
では消すタイミングは？
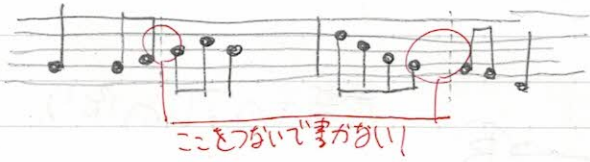


次の小節頭で消す。

小節の中で消す。

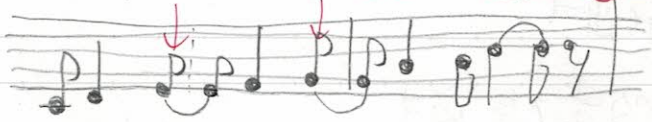
曲中はともかく、エンディングなど「無」が効果的な場所では、
ただ鳴らす長さだけ指示するのではなく、タイや休符を使って「消す位置」も明示する。

・イメージング・バー・ライン……小節の半分に仮想する線
譜面を書くときはフレーズをあまりまたがせない、
基本的に拍をまたがない書き方をすると、
リズムがとりやすい＝読みやすい譜面になる。



・休符の正しい使い方
原則として、その小節の1拍より長い休符を使わない。
（音が途絶えない状態でリズムをとりやすくする配慮。）

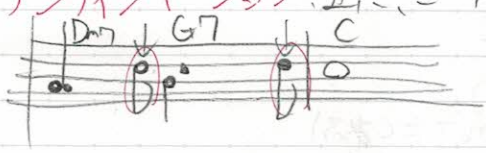
・シンコペーション：切分などによって移動されたリズム、
フレーズのアクセントが移動する。



拍子どおりのリズムから、
前後に半拍程度ずらすと、
アクセントと感じる部分がずれる

⇒一般に、小節線やイメージング・バーラインをまたぐように
音符を置くと「シンコペーションが発生する。
ただし単にタイでまたいでいる場合などもある。
（フレーズ終止位置で明示する目的のときなど。）

・アンティシペーション：逆に、コードやリズムの手前に先行して配置される音



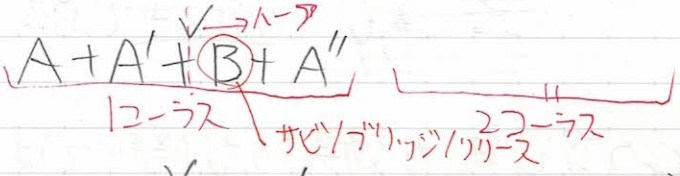
左の例だと拍の8分前に置かれている
音符がそう
非常に強いアクセントが生まれる。
※このあとのコードもテンションコードにすることで、
一段強い緊張感が生まれる。

○ポピュラー曲の形式

その前に……曲の構造上まとまった部分を楽節という。

{A ← ある楽節 / A' ← Aに似た楽節 / A'' ← AやA'に似た楽節}

{B ← Aとは違う楽節 / B' ← Bに似た楽節 / B'' ← BやB'に似た楽節} ……

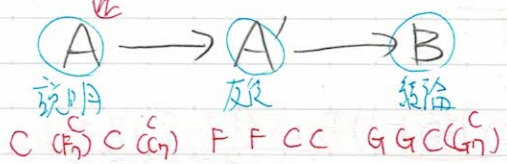


A+B ≠ A+B'

断片はするがサビを特定できない

・サビ始まり……展開が動くところからはじめる手法、CMソングとか。

・ブルース形式……3楽節構成



虎無そのアレの作り。

・曲の構成上重要な要素

- イントロ (intro.) 導入部
  - 主要なメロディーで導も出す
- バンプ
  - シンプルな伴奏のパターンを繰り返す
- エンディング
  - 曲の終わり（クラシックでいうコーダ）
- フェイドアウト
  - エンディングがなく、繰り返しながら音量的に消え入る
- インターリュード (interlude)
  - テーマとテーマの間にある間奏
- バース (verse) とリフレイン (refrain)
  - バース：歌に入る前の導入部（ミュージカルでよくある）
  - リフレイン：バースで導入された歌の本体、いつも何度も繰り返す。